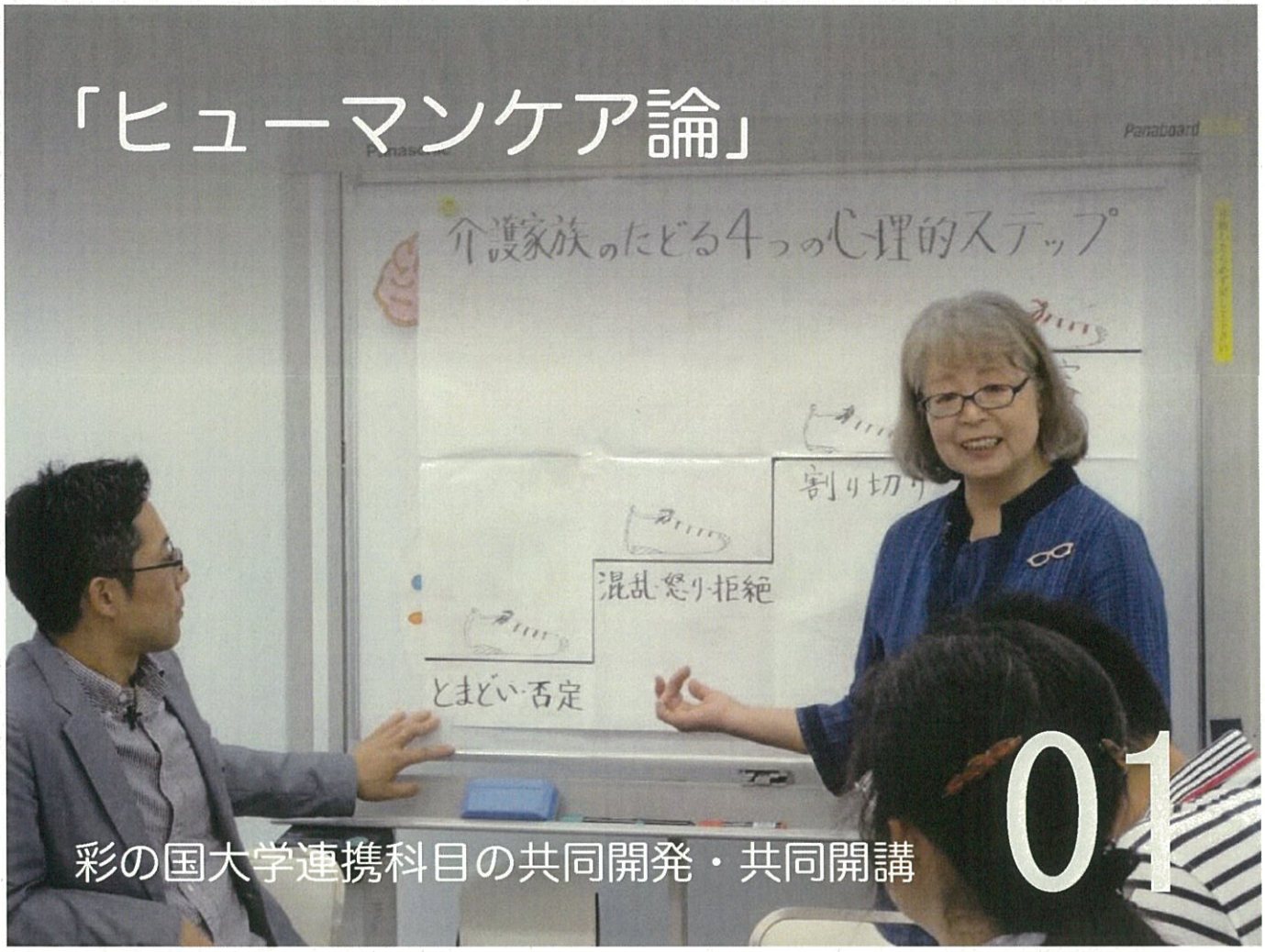
2

彩の国大学連携科目の
共同開発・共同開講について



「ヒューマンケア論」

01 彩の国大学連携科目の共同開発・共同開講

専門職によって行われる質の高いケアサービス、つまりこのサービスを受ける患者・利用者が心身ともにケアされていると実感するようなケアサービスをつくりあげられるよう、将来、専門職を目指す若い学生に最初にその理念を学んでもらおうとするのが「ヒューマンケア論」である。

○ 平成２５年度　埼玉県立大学の授業のビデオ収録

○ 平成 26 年度　DVD 教材の制作

・各大学でビデオ講義、e- ラーニングシステムなどを通じて学生が学習。

「ヒューマンケア論」 DVD 教材　タイトル一覧

巻	テーマ	内容
1	ヒューマンケアとは	なぜヒューマンケアを学ぶのかを考える
2	「生」を見つめる	「生」の意味を問い直す
3	「老い」を見つめる	老いること、それを支える意義を考える
4	病と向き合って	病と向き合うことについて考える
5	緩和ケアを通じて「生」の意味を知る	緩和ケアを通じて、「生」の意味を考える
6	チームについて考える	チームで対応することの強さ、その際の課題などについて考える
7	当事者の立場から	保健医療福祉サービスを必要とする当事者の体験をうかがう
8	まとめ	授業の全体を振り返る

（1）ヒューマンケア論

近年、地域包括ケアシステムの重要性に注目が集まっている。地域包括ケアシステムとは、医療における診断・治療・ケア・リハビリテーション・健康増進に関わるサービスの構造化とマネジメント、提供および情報交換を統合したケアと、地域を基盤にしたケアを合わせた、ケアの在り方を示すものである。市区町村を主体とした地域包括ケアシステムは、疾病予防、また多様な生活問題に対応したサービス提供機能を備えていなければならない。フォーマルなサービスの整備はもとより、家族や親類、知人らによるインフォーマルなサービスと連動させることによって、さらに効果的に機能すると言われる。そして、高齢者のみならず、障がい者、その他特別なニーズのある子どもなども対象となる将来像が描かれるべきだという指摘もなされている。さらに地域のあらゆる資源を含め、フォーマル・インフォーマルのサービスをも取り込み、それらを有機的に結び付け、このシステムを機能させる必要がある。例えば、高齢者には基本的な在宅ケアを受けながら生活を継続する長期ケア体制が必要となるが、そこには医療、福祉をはじめ高齢者の生活を丸ごと支える建築等も含む各専門職によるケアサービスが必要とされる。また、それは、国民の限られた資金源の問題からも、効率性のよい質の高いサービスであることが要求されている。

この専門職によって行われる質の高いケアサービス、つまりこのサービスを受ける患者・利用者が心身ともにケアされていると実感するようなケアサービスをつくりあげられるよう、将来、専門職を目指す若い学生に最初にその理念を学んでもらおうとするのがヒューマンケア論である。

本科目は、埼玉県立大学において専門職連携教育の基礎科目として行われている必修科目であり、本事業内においては、埼玉県立大学版ヒューマンケア論の科目内容にもとづき、4大学の学生が学びやすいよう、また、専門職連携教育（IPE）の導入という観点からも、内容や受講方法等を検討、試行した。

具体的には、共同開講科目を実施するにあたり、4大学の地理的距離の問題を解決するため、4大学で共有可能なデータ教材を作成し、e-ラーニングを活用する方法を検討した。具体的な教材ツールとして、ヒューマンケア論の映像教材（DVD教材）を作成した。平成25年度には、埼玉県立大学で開講されたヒューマンケア論の講義の様子をビデオ収録し、DVDとして各大学に配布、各大学は独自の設定科目や教育コンテンツの中で活用を検討し、使用した。埼玉医科大学では、学内の「講義収録・配信システム」によって学生に公開し、学生へ視聴を促した。城西大学では、学内のe-ラーニングシステム「Web Class」上で学生に公開した。学生34名が1講義以上を視聴、そのうち2名が全ての講義を視聴し、薬学部長より受講修了証を授与するなど、独自の取組も行われた。日本工業大学においては、1年生対象の科目「フレッシュマンゼミ」の時間を用い、3講義分のDVDを視聴した。

城西大学、日本工業大学においては、視聴後にアンケートを実施した。自由記述形式の回答欄には、「建築を考えるうえで、もっと“ひと”について考えようと思った」「コミュニケーションについて、思いもつかなかったような考えに触れられて興味深かった」といった記述がみられた。

平成25年度の試行における成果として、埼玉県立大学以外の3大学の学生に対しても、ヒューマンケアへの興味・関心をもつ機会を提供し、IPEを通じて専門職従事者を目指す学生が身につけるべき倫理感や態度を形成する一助となったことが挙げられる。他方、課題としては、1講義90分間をそのまま視聴覚教材として用いることは、時間的に難しく、また講義内容に対する補足や、資料提示の充実が必要であることが挙げられた。

上記の課題をふまえ、平成26年度では、講義版ヒューマンケア論のゲストスピーカーに協力を依頼し、4大学の共同で作成することとした。具体的には、視聴覚教材の企画、構成、出演に関しては、4大学の教職員および学生によって行われ、収録および編集作業は外部委託とし、作成する教材を視聴者にとって見やすい、理解しやすいものにすることを目指した。平成26年7月に、全8巻の教材用の収録が埼玉県立大学で行われ、各回の収録用講義には、4大学の学生や教員が参加した。最終回の「まとめ」では、学生が講義内容を振り返り、ディスカッションをするという内容が盛り込まれた。

DVDの編集は終了しており、現在、埼玉県立大学以外の3大学において、平成25年度と同様の方法で、学生が視聴する機会を準備、一部試験的に使用した。今後の課題としては、作成したDVDの活用方法の展開、ヒューマンケア論の目的や、専門職連携教育の導入としての、講義における課題の設定が挙げられる。

（埼玉県立大学　大部令絵）

共

「ヒューマンケア体験実習」

彩の国大学連携科目の共同開発・共同開講 02

「ヒューマンケア体験実習」は、「ヒューマンケア論」で学んだことを保健・医療・福祉の現場で実際に体験し、確認を行う実習である。平成 25 年度と 26 年度、既存のカリキュラムに類似科目のない日本工業大学の学生を対象として、県立大学で行ってきた方法による試行を行った。

○ 平成 25 年度　試行　：日本工業大学の学生４名が参加

・オリエンテーション	平成 26 年２月２０日（木）
・施設での実習	平成 26 年２月２６日（水）
・リフレクション・報告会	平成 26 年２月２８日（金）

○ 平成 26 年度　試行　：日本工業大学の学生５名が参加

・オリエンテーション	平成 27 年２月１７日（火）
・施設での実習	平成 27 年２月２０日（金）
・リフレクション・報告会	平成 27 年２月２１日（土）

（2）ヒューマンケア体験実習

「ヒューマンケア体験実習」は、「ヒューマンケア論」で学んだことを保健・医療・福祉の現場で実際に体験し、確認を行う実習である。援助を必要とする人々、保健医療福祉に携わる人々、一緒に実習を行うグループメンバーとの直接的な関わりを通じて、①自己の人との関わり方を客観視する姿勢、②グループメンバーと協力し合う姿勢、③援助を必要とする人々のニーズや保健医療福祉に携わる人々の役割へ関心を向ける姿勢、④多様な人間観・価値観を理解しようとする姿勢を養うことを目的としている。

埼玉医科大学および城西大学には保健・医療・福祉の現場で行う実習科目が既にあり、それらの科目に「ヒューマンケア体験実習」で学ぶべき内容を付加していくことが可能である。一方、日本工業大学の既存のカリキュラムに類似の科目はない。そこで、平成25年度と平成26年度、埼玉県立大学で実施している「ヒューマンケア体験実習」の実施方法を日本工業大学の学生に適用させることが可能か否かを検討することを目的とした実習の試行を行った。日本工業大学の学生に加え、複数大学の学生が参加するかたちでの実施が望まれるが、実習可能な時期が異なることから日本工業大学の単独での実施となった。ただし、埼玉県立大学の教員がファシリテータとして参加し、協働での実施となった。

この日本工業大学版「ヒューマンケア体験実習」（試行）では、日本工業大学の学生が理解しやすいように、上記の①から④に加え、「援助を必要とする人々の“生活のありよう”、“思い”などを理解し、その人の立場で考える態度を養う」ことを目的に加え、特に重視する事項として学生に提示した。また埼玉県立大学で実施している「ヒューマンケア体験実習」では、保健・医療・福祉の現場での実習の日数が3日間であるが、日本工業大学版の試行では1日のみとした。現場での実習の前後に、オリエンテーション及びリフレクションを実施し、全体では3日間にわたる実習となった。

平成25年度は、平成26年2月20日（木）にオリエンテーション、2月26日（水）に施設での実習、2月28日（金）にリフレクションを実施した。参加者は、生活環境デザイン学科3年生・1名、2年生・1名、1年生・2名の合計4名であった（1名がリフレクション・報告会を欠席。）。実習施設は介護老人保健施設プルミエール（北葛飾郡松伏町）であった。平成26年度は、平成27年2月17日（火）にオリエンテーション、2月20日（金）に施設での実習、2月21日（土）にリフレクションを実施した。参加者は、生活環境デザイン学科1年生・5名であった。実習施設は特別養護老人ホーム杜の家やしお（八潮市）であった。前年の試行により、埼玉県立大学と同様、1年生を対象とした実施が可能であり、有効と判断し、1年生のみを対象とした。執筆の時点で、平成26年度の試行は終了したばかりで総括が未完了であるため、以下では平成25年度に実施した日本工業大学版「ヒューマンケア体験実習」（試行）の概要と成果について記す。

オリエンテーションは、日本工業大学を会場として、埼玉県立大学の田口孝行教授の主導により行われ、実習の目的、実習の流れ、リフレクションの意味と方法、実習を行う上での注意点について説明がなされた。日本工業大学の教員は2名が参加し、ファシリテーションの研修の意味も兼ねて、田口教授を補助した。受け入れ施設の職員の方には、施設ファシリテータとして、事前および当日における諸事の調整をお願いした。

施設での実習の当日は、朝礼への参加から始まった。参加学生は自己紹介を行うとともに、実習で学びたいことを施設職員の方々にお伝えした。学生の発言から、実習の目的をよく理解して参加していることが窺え、オリエンテーションが有効に働いたと感じられた。その後の施設見学では介助や生活のために工夫された設備に興味、関心を示す学生が多かった。これは建築系の学生ならではの視点と考えられる。最初は、自分から気づく部分は少なかったが、徐々に学生から案内してくださった職員の方への質問や、自然ともれる感想が増えていった。

施設見学後、「介護老人保健施設とは」と題するレクチャーをしていただき、その後、昼食前の10分程度、利用者の方々とお話しする機会を得た。普段、ご高齢の方と接する機会が少なく、また初対面の方との関わり方に慣れていない学生たちは、少々戸惑いの表情や、ぎこちない姿勢のままお話しをしていた。しかし、施設側のファシリテータに導かれながら利用者の方々と積極的に関わろうとしていた。

午後は、全員が利用者の方々と積極的に対話することができ、笑顔で向き合い、利用者の方々の笑顔を引き出していた。車椅子や椅子に座っている方と目線の高さを合わせること、しっかり目をみて離すことなど、コミュニケーションを円滑にする工夫を意識的か、無意識的か定かでないが、短時間のうちに学生たちは身につけていった。

後日行われたリフレクションでは、実習に対する感想や意見を互いに引き出し、グループとしてどのような経験を得たかをまとめ、発表することができた。

実習後、学生から提出されたレポートをみると、利用者の方々との対話を通じて、「それぞれの経歴・背景を持つ多様な個人であることを認識した。」「笑顔で応じてくれたこと、感謝の言葉をもらったことに喜びを感じた。」「コミュニケーションの取り方について実習中に工夫し、学んだ。」といった感想が示されていた。実習の中で、複数の専門職の方々が1人1人の利用者のケアについて確認・検討する「施設利用計画」のミーティングを見学する機会を得て、1人1人の生活を支えようとする専門職の方々の姿勢に感銘を受け、将来は自分も建築分野の専門職として、そのような場に加わることに期待を示す学生がいた。また、個人およびグループでのリフレクションを経験し、「リフレクションの大切さを理解した。」「チームメンバーを尊重しつつ対話することで、幅広い視野をえることができると認識した。」といった感想もみられた。

実習の試行において、参加学生は与えられた時間の中で、積極的に利用者の方々と関わり、利用者の生活のあり様、一人一人の生活の背景や思いに触れることができた。実

習の目的を果たすことができ、「ヒューマンケア体験実習」を日本工業大学生活環境デザイン学科の低年次の実習科目として配置した場合、様々な分野の人材と連携する基盤を養う上で有効と思われた。さらに、専門分野に対する学習意欲を高める学生も見られた。今後、実習の日数を増やした場合、援助を必要とする人々や保健医療福祉に携わる人々について、より多くの情報や多様な側面に触れ、思考が飽和する場面もあるかもしれないが、より深い理解を得ることが期待される。今後は、複数日に及ぶ実習も試行し、正規科目化に向けた検討に対する参考を得ていきたい。

（日本工業大学　勝木祐仁）